

「京城座談会」再読

朴光賢(パク・クァンヒョン／東国大)

[訳＝渡辺直紀](本稿で引用されている座談会は全文が原文日本語だが、この訳稿では時間の関係で原文参照の作業を省略した。——訳者)

1、一つのイベント、二つのテキスト—1938年「京城座談会」

1938年10月「内地」の『文學界』同人・林房雄と村山知義は、秋田雨雀や張赫宙とともに満州へ向かう途中、京城に立ち寄って朝鮮の文人との座談会に参加した¹。京城座談会は『京城日報』(1938.11.29.～12.18)と『文學界』(1939.1)にそれぞれ「朝鮮文化の将来と現在」と「朝鮮文化の将来」というタイトルで掲載された。一つのイベントが『京城日報』編集者(学芸部)版本と『文學界』編集者版本という二つのテキストとして存在することになった。朝鮮と「内地」という言説の場の格差のために生じた二つのテキストの間の微妙な違いと亀裂を讀解することは、きわめて興味深いことである。

だが、かつて金允植が『京城日報』の版本を『文學界』が転載したと指摘して以降、そのまま受け入れられてきた²。その違いが目されたのは最近のことである³。だが、その違いの論拠は『京城日報』版本が『文學界』版本より先行しているということであり、また、転載したのではなく、それを底本に「内地」の観点で修正・加筆したというところにある。そうすることで『文學界』版本が被植民者と「内地文人」の間の緊張感を無化させたという主張である。すなわち、二つの版本の違いを、被植民者(朝鮮文人)と植民者(「内地人」)の間の緊張の構図として読んでいくということである。

もしその二つの論拠を否定する仮説をたてるならば、二つの版本間の違いをめぐる議論は変化しうる。はたして『京城日報』版本を底本に『文學界』版本が作られたのであろうか。また、京城座談会を、被植民者(朝鮮文人)と植民者(「内地人」)の間の構図として読むことが正しいのか。まず後者の場合を単刀直入に言えば、『京城日報』が被植民者の声をそのまま伝達することに、はたして忠実だったのだろうかという質問を投げれば、その答えは明白である。

本稿では、このような問題提起を通じて、京城座談会の構図に注目しながら、何よりそのイベントの文学史的意味について主として再論したい。

『文學界』版本の後記では「時間の関係上、修正して朝鮮に送る余裕がなかったので、東京にいる村山氏を除いては加筆をお願いできなかった」という事情を明らかにしている。当時の電信通信の条件を考えてみる時、10月下旬に開催した座談会を朝鮮と「内地」の多数の参席者に校閲と加筆を受けて、翌年1月号に完全に合意されたテキストを作り出すことはさほど容易ではなかつたろう。この後記でわか

¹ 以下「京城座談会」と略称。

² 金允植(白川豊訳)「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題—解放前における朝鮮作家の日本語による創作について—」『朝鮮学報』第186号、朝鮮学会、40頁。田村栄章も句読点や漢字使用の有無など若干の表記違いを見せるだけ一致するとし金允植の見解に従っている(「1939年朝鮮植民地文学の転換点」、『日本文学』20集、2004)。

³ クォン・ナヨン「すれちがいの遭遇と葛藤する欲望の検閲」、韓国学世界化事業団:延世大学校国学研究院編『日帝植民地時期の新たな読解』、ヘアン、2007、シン・ジョン『不／在の時代』、ソミョン出版、2012。

るのは、まず『京城日報』テキストに対する存在が全く意識されておらず、また最終加筆者が村山だけだという事実である。『京城日報』は11月29日、30日、それから12月2日、6日、7日、8日にかけて6回連載した。このように紙面に収録された時点で見れば、京城日報側が約1か月ほど先んじている。そのために『京城日報』版本を『文學界』に転載したと判断したり、その違いに注目した論文でも『京城日報』の版本を「内地」の『文學界』で修正加筆したと判断してきた。だが、新聞と雑誌という媒体の特性を考慮すれば、ほとんど同じ時期にテキスト化された可能性が高い。二つのテキストの間の前後関係の問題を既定事実化したり、そうすることで『京城日報』側のテキストを底本として、『文學界』側がテキスト化したものであると既定事実化するのは生半可な判断であろう。

二つの版本を見てみると、事実、座談会中に『京城日報』と『文學界』は、それぞれの媒体にこの座談会を掲載・紹介する意図があることを前提に進めたことを明らかにしている。まず『京城日報』の版本では、この新聞社の学芸部長・寺田瑛が冒頭の発言で、この座談会が「京城日報としても半島文化に対する一つの役割ができる」機会だったと明らかにしている。一方、『文學界』の版本には、寺田の冒頭の発言が消去されている⁴。反面、林が座談会の整理発言を通じて「内地の『文學界』に掲載しようと思います。内地の人々に読まれればと思います」として掲載の意思を明確にしている。だが、この林の整理発言も『京城日報』の版本では脱落している。その代わりに寺田が座談会を終える発言が入っている。このようにそれぞれの媒体に掲載されるだろう情報を相互に消去している。

それぞれの媒体で互いに脱落させたこの二つの発言の存在を通じて、それぞれ座談会の意味を額面通りに理解するならば、『京城日報』は「半島を新しい認識の下で眺めることになった時に」朝鮮の文人を集めて「内地」文人の発言を聞く場を準備することで、自らの役割を表明している反面、『文學界』は朝鮮文人の声を「内地の人々に」伝えたいという意図を示している。このような意図の違いによって、一つの出来事(座談会)をめぐる植民地朝鮮と日本でそれぞれ発行される媒体の意図によって、異なって再現される状況を如実に示しているのである。

問題は、もし互いの存在(可能性)を認知したと仮定するならば、ある種の相互交換があるにもかかわらず、なぜ微妙な違いを示さねばならなかったのか、逆にそうではなく無視した結果ならば、同一のイベントが「内地」と朝鮮でそれぞれ異なるテキストとして存在しうる状況を容認したのはいったい何を意味するのか、ということであろう。

2、二つの媒体が意図した参席者の構図

参席者:秋田雨雀、林房雄、村山知義、張赫宙、辛島驍(京城帝大助教授)、古川兼秀(総督府図書課長)／鄭芝溶(詩人)、林和(評論家)、兪鎮午(普成教授)、金文輯(評論家)、李泰俊(小説家)、柳致鎮(劇作家)

⁴ 『京城日報』のテキストでは「今回の私たちの旅費は、実は満州で出しているのです、京城で使ってははいけません。ですが、今日で5日も滞在している」と明らかにした内容を省略している。

『文學界』は、当時、波線〔本訳文では斜線で引用・表記。以下同じ／訳者〕が区別を意味する記号だったという意図を勘案すれば、基本的に「内地人」側と朝鮮人側を波線で区分して、辛島と古川の二人の在朝日本人を「内地人」側に含ませている。このような区別が意味するところは二つほどに整理できる。一つはその区別で張赫宙という例外的存在もあるように、それは必ずしも人種的区分に基盤をおいたものとはいえない。むしろ座談会の主題が朝鮮文化であるという点で見れば、それをめぐる「質問する者」と「答える者」の構図と見た方が正しいだろう。また、使用（文学）言語にもとづいた区分として読むこともできる。それとともに座談会の主題である朝鮮文化と、それを担う朝鮮文人をより顕著に分離させる効果を産んでいる。もう一つは、先に指摘したように、形式的に座談会の主催者が『文學界』であることを示すためか、京城日報学芸部長の寺田の存在を消去しているという点である。のみならず辛島に発言の機会がさほど与えられないの⁵、『京城日報』では寺田の冒頭の発言で、この集まりの意義の一つとして言及した古川図書課長の発言機会が、非常に形式的に準備されているという点も目につく⁶。そうした点から見る時、『文學界』のテキストでは在朝日本人の存在が薄い。座談会の後半に総督府図書課長である古川に発言の機会が与えられるが、これは村山、秋田、張赫宙が、府民館で開かれた演劇講演会のために帰った後のことだった。そのために、その後は座談会が事実、朝鮮人文人らと総督府検閲担当者の対話に縮小される。その内容も、比較的長い発言にもかかわらず、やや食傷気味である朝鮮文化停滞論や民度についての話に過ぎないが、しかし二つの版本間で最も大きな違いを示す発言でもある⁷。そして次第に総督府検閲の実際の状況に対する朝鮮文人側の陳情が入ると、林は座談会を終えることを提案する。

『京城日報』

兪鎮午:どんなものが押収されるのですか。私のような人間が考えても、そんなに悪いとは考えられないんですが……。

古川:反社会的なもの、反日本的なものは当然取り締まります。その他は、純文学的な立場で見て、大抵は寛大にさせています。

兪鎮午:結論まで読まないで差し押さえてもらったら困ります。

古川:共産主義のやり方を詳しく書いて、最後の 5、6 行で「すなわちこのようであるからだめだ」というようなものは、たとえ結論が良くても主義宣伝の効果を考慮して差し押さえます。

兪鎮午:途中の段階が悪くても結論が良ければ大丈夫だと思うんですが。

⁵ 辛島のほとんど唯一の発言が掲載された『京城日報』12月2日付の発言と、『文學界』の発言内容を比較すると、『京城日報』発言の前半部が省略されていることが確認できる。その内容には「朝鮮作家との対話」の必要性和「朝鮮語が持つ味、沿革」等の理解の必要性に言及している。

⁶ 古川については、蔡萬植の短篇「民族の罪人」で、「金君」が尹には「敗戦を通じてみた日本人の民族気質」に関して書くことを依頼しながら、日本が降伏した後「何か古川のやつは咸北支社に行って、そこで捕まったまま警察署の「コスカイ」（お手伝い—引用者）をしていたぞ」といって、敗戦後「卑屈な日本の印象」について何か書くことを今一度そそのかす場面でも言及される。実際の敗戦当時、古川は総督府図書課長と情報課長をつとめ、咸鏡北道支社に勤務した。

⁷ 二つの版本の間の違いに対する記述。この古川の発言は、各テキストのものより長いものと判断される。その発言を各媒体が意図的に縮約・抜粋したのだが、最も大きな違いは、『京城日報』側は「朝鮮の文芸界は総督政治以降めざましい発達をとげた」という趣旨の内容が掲載されている反面、『文學界』は、それが言及されていないものの、分量面ではより長いという点である。

古川:それはだめです。途中が悪ければ今、言ったように……。

林:もうこのくらいで終えることにしましょうか。

寺田:それでは、本当にありがとうございます。(終わり)

『文學界』

兪鎮午:途中の段階が悪くても結論が良ければ大丈夫だと思うんですが……。

古川:それはだめです。途中が悪ければ今言ったように……。

林:もうこのくらいで終えましょう。残りの話は飲みながらやりましょう。この座談会は内地の『文學界』に載せようと思います。内地の人々に読まれればと思います(拍手)。それではこれで終えます。本当にありがとうございました。

そして最後に『文學界』版本では、「内地」側の参席者を除いた参席者には、各自の肩書きを括弧の中に入れて説明していることを注意深く見る必要がある。「内地」と朝鮮という明白な構図の中に在朝日本人の存在感はかすんでしまう。一方、『京城日報』の版本では参席者の区分を別にしている。

参席者:村山知義(小説家)、林房雄(小説家)、秋田雨雀(文学者)、張赫宙(小説家)／辛島驍(城大助教授)／古川兼秀(総督府図書課長)／鄭芝溶(詩人)、兪鎮午(普成専門教授)、林和(評論家)、李泰俊(小説家)、金文輯(評論家)／寺田瑛(本社学芸部長)

『京城日報』は、本社側の寺田以外には「内地」側と朝鮮側参加者の間に在朝日本人の名簿を配置して区分した(そのうち誤植かもしれないが、6回の連載にもかかわらず、柳致鎮の名前は脱落したままだった)。「本社学芸部長」と寺田の名前を明記して、座談会のタイトルの横には「本社主催」であることを明示しているが、これは単に座談会の主催が京城日報社であることを示すだけでなく、それ自体として在朝日本人の自意識の発露であるといえる。『文學界』とは異なり、「内地」側の参席者にも各自の肩書きを表示したのも、彼らを相対化する意味として解釈可能だろう。反面、自分たちは学界(あるいは文学界)の辛島、政・官界の古川、そして言論界の寺田として参加資格を弁別可能にすることによって、『文學界』のように自分たちを集団化して眺める態度を矯正しようという無意識が見られる。『文學界』の同人である林、村山のお二人をはじめとして、秋田、張赫宙氏らが京城に来られたので、ここに朝鮮の文化人に集まりを要請(強調—引用者)したという寺田の発言のように、「要請」の役割を京城日報が果たしたとすれば、その対象は「内地」側を相対化する概念としての「朝鮮の文化人」、すなわち人種的基準を超越した植民地朝鮮の文化(知識)人であるから、辛島と古川の存在がさらによく強調されているのは自然なことといえる。

座談会の内容に入ると、二つのテキストの間には微妙な違いが見られる。まず二つのテキストのタイトルがそれぞれ「朝鮮文化の将来」(『文學界』)と「朝鮮文化の将来と現在」(『京城日報』)であることは座談の比重をどこに置いているかを示す。座談の進行は概略「朝鮮文壇の現況→春香伝公演を契機とした演劇現況→創作言語の問題→朝鮮文化全般(および検閲)の現況」と続いている。だが『京城日報』

では「連載」という特性のためか、その比重が並列的關係で構成されている反面、『文學界』では創作言語の問題、すなわち「内地語」創作を奨励する場に比重を置いて、将来の問題に焦点を合わせて構成されている⁸。

また「内地では朝鮮に関しては何も知らないんです」(『文學界』)といった林の冒頭の発言が、『京城日報』では「内地の作家はほとんど朝鮮に関しては知りません」となっており、微妙な違いを示しているが、これは座談会的前提が何なのかを示している。「質問者—返答者」の構図で座談会が進められているのであり、この結果、朝鮮文化に対して無知な「内地」に紹介する恩恵を与える場になるだろうことを前提にしているのである。だが『京城日報』では「内地の作家」だけが朝鮮に対して無知なことに限定している⁹。在朝日本人(特に総督府官僚)は誰より朝鮮に対してよく分かっている位置から朝鮮統治を遂行していることを自認し、その失政に対して批判すれば、朝鮮の実情に対して「無知」なものとして逆批判したりしている。

基本的にこの座談は即興的なイベントであった。その即興的な状況は、「内地」文学者が無援であることすら感じさせる。このことは、「内地」文学者は朝鮮(語)文学に対して驚くほど無知であるという事実だけを示してしまった。一言でいえば、「内地」文学者の朝鮮(語)文学に対する無知が、即興的な演出を通じて暴露された出来事であると定義できる¹⁰。

この座談会は、「すでに私たちはこのように諸君らと座談会をしても意味が通じるように」(林)なった状況、すなわち日本語で通じる場であった。だが、その座談の主なトピックは「内地」作家が理解できない、無知の朝鮮(語)文学だった。朝鮮(語)文学をはじめとする広範囲な朝鮮文芸の全般をトピックとして扱う、この矛盾した「日本語」イベントにおいて、前半は「内地」文人が朝鮮の文化界の状況を聞いて朝鮮人が答える構図で座談が進められたが、次第にその構図は崩れていく。朝鮮語と日本語を同時に駆使する朝鮮人は、『文學界』の作家を「内地の先輩たち」と呼び、彼らの権威を認めているが、これは彼らが朝鮮文化界に無知であるという事実が示されれば示されるほど、それに対する嘲弄のように読むこともできるのである。

3、「国語」と「内地語」のあいだ

⁸ 『文學界』のテキストで「タイトルに「現在」が抜けているということは、朝鮮文化の「過去」に注目する宗主国批評家の関心と、座談会を「現在」に導こうとする被植民者の試みの間の、相異なった欲望の意味を熟考させる、有用な糸口の役割をしているとクォン・ナヨンは指摘する(クォン・ナヨン、215頁)。だが文学雑誌と資本、国家権力などの力が作動する再現の問題を通じて、この座談会の構図を見直すならば、「内地」文学人と「被植民地」文学人との關係でなく、「内地」文学人(『文學界』)と植民者(『京城日報』)の間の關係と解すべきものと判断される。

⁹ このような違いは随所に見られるが、たとえば「総督府であまりにも朝鮮の雑誌を奨励しない傾向」(『文學界』)のために、その数が減っているという金文輯の発言は、「総督府の意向などがあって」(『京城日報』)となっていたり、雑誌『三千里』は歴史が長く、700~800人の読者が購読するという発言は省略されているという点だ。クォン・ナヨンはこのような「内地」文学人の無知の認定が、『文學界』では「冗談」のように覆い隠されているが、このような類型の座談会ではよく使われる手であると指摘している(クォン・ナヨン、前掲論文、216頁)。

¹⁰ クォン・ナヨンが指摘した「植民地の脈絡において、座談会はあまりにも刺々しく不安であったため、親密で格式がないという仮想と、事実「そのまま」再現したような外観を作り出す、その形式自体が、名士たちの権威を示しながら、この不安定な時代に植民者と被植民者が、実に開放的な交流や対話にともに参加していると信じさせた」ということは、記事への再現の過程で作られたものといえよう(クォン・ナヨン、前掲論文、211頁)。

このような参席者の構図の違いを前提として、ここでは創作言語の問題を扱った座談内容を中心にその違いを見てみたい。この話題は、張赫宙の発言のうちほとんど唯一意味があると見なされる言葉から出発する。彼は「林和君、過去の朝鮮、現在の朝鮮を題材にした戯曲を、内地の演劇界で上演するのと、もう一つ、朝鮮語になったのを内地語に翻訳したり脚色して内地人に紹介するという、この二つは、私たちが必ずやるべきことだと考えます。朝鮮語劇団が朝鮮語演劇を内地でやるのもいいが、それが及ぼす影響はきわめて制限されたものです。そういう意味で内地語で書いた『春香伝』をやったのです」(『文學界』、以下、強調—引用者)と発言する。だが、朝鮮人参席者がみな「難しい」(兪鎮午)、「三文の価値もない」(金文輯)、「作品固有の味を喪失」(林和)、「内地訳では他の春香伝」(金文輯)等の表現を使いながら、いっせいに反論する。

そして続く対話がそれぞれの媒体に次の通り記録されている。

『文學界』

李泰俊:秋田先生にちょっとお聞きしたいが、先立って朝鮮語で書こうが内地語で書こうが関係ないとおっしゃったが、私たちには重大なことなので、本論とは少し違いますがお聞きします。内地の先輩たち側では、私たち朝鮮の作家が朝鮮語で書くことを心から希望していますか、あるいは内地文で書くことをそれ以上に希望していますか？

秋田:私たちの作家の要望は、そして大衆の要望として、すなわち対照(「対象」の誤植だろう—引用者)を大衆に置いた作家としては内地語がいいと考えます。(『文學界』)

『京城日報』

李泰俊:秋田先生にちょっとお聞きしたいが、先立って朝鮮語で書こうが国語—内地語で書こうが関係ないとおっしゃったが、私たちには重大なことなので、本論とは少し違うがお聞きします。内地の先輩たち側では、私たちの朝鮮の作家が朝鮮語で書くことを心より希望していますか、あるいは内地文で書くことをそれ以上に希望していますか？

秋田:何ですか？よく聞こえないんですが……。

林和:朝鮮の人は内地文で書く方がいいのか、朝鮮文がいいのかです。

秋田:私たちの作家の要望、そして大衆の要望として、すなわち対象を大衆に置いた作家としては国語が良いと考えます。

上の引用文には多少揺れが見られるが、『文學界』では朝鮮語に対応する日本語を指し示すところに概して「内地語」という表現を使う反面、『京城日報』は「国語」と表現している。同一人物の同じ発言がどのように違いを示しているのである。座談会場で実際にどのような表現を使ったかは分からない。だが、座談会場の実際の発言をそのまま使おうがそうではなかろうが、それはすべて編集者の意図を反映した結果であろう。

ならばなぜ『文學界』は「内地語」で、『京城日報』は「国語」だったのだろうか。

まず指摘できるのは、当時「国語」と「内地語」という記号のそれぞれの政治的意味が異なっていたという点である。『京城日報』で使った記号、すなわち1938年3月第3次朝鮮教育令の頒布以降、「国語」常用が法制化された朝鮮における「国語」とは、それ自体として「日本国家の標準語」以上の政治的概念である。第2次朝鮮教育令(1922)で「国語を常用する者」と「国語を常用しない者」で民族の差よりも言語の差を通じて教育対象(制度)の違いを明文化したのは、差別を根幹とした政策だが、これは「国語」の外側の存在を認定(?)したのものである。第3次教育令はそれとは異なり、国民の一体化という脈絡で違いを消去しようという企画だった。だが、国民の一体化は排除の論理が作動する。したがって「国語」は単一であり、その外側は排除されざるを得ない。植民本国で「国語」という表現は「万世一系の国体」の伝統と結合した精神主義的で国粹主義的な概念を内包したものである。このような論理の根幹には民族と言語の一体性という信頼が存在する。そのとき被支配民族にも同じ論理が適用される。ただ、「国語」という記号が、植民本国では、その政治性を隠して言語を自明化して自然化することだったとすれば¹¹、植民地における「国語」は、民族と言語の一体性を否定する人為的なものにならざるをえない。したがって座談会で善意と恩恵の授与の次元で表現された「国語」という記号は、それ自体として語弊があるのである。一方、『文學界』の「内地語」という記号は、民族と言語の一体性という「国語」を自然化する認識の次元から見ると、「国語」が朝鮮語でもありうるという誤解を払拭するだけでなく、「内地」では帝国言語のスペクトラムの中で朝鮮語の存在を認めるという善意が伺えるといえよう。

前の引用文の局面①から、日本語と朝鮮語がどのように表記されたかをもう少し見てみよう。

発言者(日付は京城日報のもの)	『文學界』	『京城日報』
①秋田<12.6>	朝鮮文、内地語	朝鮮語、国語
李泰俊	内地語	国語 — 内地語
	朝鮮語、内地文	朝鮮語、内地文
林和	<消去>	内地文、朝鮮文
秋田	内地語	国語
村山	国語(普及)、内地語	国語(普及)、国語
林	内地語	国語
②秋田	翻訳発言	
村山	内地語—朝鮮語	国語—朝鮮文
李泰俊	内地語—朝鮮の文字	国語—朝鮮文
③林<12.7>	アイルランド文学の例—朝鮮人の固執発言	
林	内地語	内地語
村山	朝鮮語—内地語	朝鮮文 — ×

¹¹ イ・ヨンスク『国語という思想』、岩波書店、1996、275-276 頁参照。

④村山など退場後		
兪鎮午	内地語	内地語
林	内地語	内地文
⑤古川発言		
林	内地語	内地語
⑥李泰俊—林<12.8>		
朝鮮文化、日本文化、世界文化		
林	内地語	内地語
【備考】辛島<12/2>		
朝鮮文—内地語		朝鮮文—内地語

前でも指摘したが、『文學界』の場合はほとんど一貫して「内地語」を守っている。雑誌の特性上、あるいは村山一人で修正したためか、『京城日報』に比べて明確な一貫性を示している。『京城日報』の場合は、局面が転換する過程によって「国語」から「内地語」に変化している。このような違いは、もしかしたら各媒体の編集者の意図を示していることもありうるが、むしろ編集の意図が反映されえなかった無意識を読み取れるような部分でもある。

①の局面は、前の引用文に先んじた部分でもあるが、秋田の発言に対する李泰俊の質問状況に続く部分である。秋田は「朝鮮文—内地語」といっているが、これを受けて質問した李泰俊は「朝鮮語—内地文」と発言する。一方、『京城日報』には、秋田の発言が「朝鮮語—国語」になっているが、李泰俊の発言の部分は同一である。もちろんこれもまた座談会場では実際にどのように発言したのか分からないが、李泰俊の発言の部分は同一なことから見て、発話内容そのままであろう。秋田の発言を受けて発話したにもかかわらず、なぜ彼は「朝鮮文」を「朝鮮語」と、「内地語」を「内地文」と対応させて発言したのだろうか。秋田の発言において、言語＝「内地語」とは生まれつきで本源的なものであり、文字＝「朝鮮文」は、その相対的な概念として使われているのだろうが、李泰俊はそこに対応しようとする(無)意識をそのまま示したといえる。この点は『文學界』では消去されたが、林和が李泰俊の質問を再度、秋田に伝える過程で、「内地文—朝鮮文」と修正したのも、そのような状況の緊張感を感じさせる。

一方、在朝日本人社会の知識界、ないしは文壇の一員として参加した辛島は、その数少ない発言機会にもかかわらず、【備考】で提示したように「内地語」と「朝鮮文」という区分意識が明らかである。他の人々が「朝鮮文」とした意図を推察させる部分である。彼は「朝鮮文」の作品が売れるためには「内地語」に翻訳するのも一策であるという点を提示するが、このとき「朝鮮文」は翻訳の対象であり、翻訳されることによってはじめて読者を獲得する作品になる、本質的に何か欠如し否定された存在であり、不完全な存在であるという意味を含蓄する。そのように見るとき、先の李泰俊の「朝鮮語—内地文」の発言は、「発話主体の立場＝朝鮮語を生まれつき解する者の立場」から、「内地文」を対象化しようとする意識が伺えるといえる。

次の②、③、④の局面にある日本人の発言のうち、「朝鮮文」は、脈絡的に見たとき、すべて辛島の発言の意図と同一に読むことができる。だが、このような意図が『京城日報』のテキストだけに明確だという

事実は非常に興味深い。『文學界』における「内地語—朝鮮の文字」という李泰俊の発言が「国語—朝鮮文」と発言したことにもなっている。読者、資本、権力などが優位にある「国語」に翻訳・創作されるときこそ、「朝鮮文」が本質的に持つ欠如性が克服できるという意識が、あるいは強要が、そのなかに位置しているのである。

だが、不思議なことに③、④、⑤、⑥では、『京城日報』が「国語」というべきだった部分に、すべて『文學界』と同様に「内地語」と書いている。このように『京城日報』で「国語」が「内地語」に変わる一貫性の欠如が意味するところが、まさしく『京城日報』編集陣の無意識の産物であるといえる。換言すれば、自らの内面にある「内地語」＝内地人と「国語」＝朝鮮の間における同一性／非同一性の存在的混沌を示しているのである¹²。

4、座談会以降——在朝日本人の立場から

この座談会は極めて即興的に用意された席だったが、「転換期」の朝鮮文学界に見られる兆候が議論された。まず、朝鮮(語)文学が「内地」に紹介され、朝鮮の作家の日本語創作が活発になり、日本文壇の「朝鮮文学ブーム」といえるほどの変化がみられた。これは京城の座談会でわかるように「内地」作家が朝鮮文学に対して知ろうとした欲求と、朝鮮作家が「内地」に朝鮮文学を知らせようとした欲求が合致した結果であった。

このような流れとともに朝鮮で起きた最も大きい変化は、やはり1939年10月の朝鮮文人協会の発足だった。古川が「昨年作られた朝鮮文芸会が龍頭蛇尾で終わったことは残念だった」(『京城日報』)とし、「大きな協会のようなものを作って、そこでできるだけ援助」(『文學界』)とすると座談会で約束した事実は想起するに値する¹³。20年余りの間、朝鮮で文学をしながらも朝鮮側の文壇と評壇がほとんど知られることがなかったという杉本長夫の言葉のように¹⁴、朝鮮文人協会は「内鮮人」の新たな出会いの場であり、感情交換の場であり、朝鮮内の「内鮮」文人の単一組織であった。また、林が「今回の事変に朝鮮人の文士が従軍するよう総督府に請願」といった偶発的な発言が、実際の1939年3月「皇軍慰問

¹² 『文學界』側は「内地語」という表現を日本語での翻訳と創作という主題に合わせて文学語に限定して使っている反面、『京城日報』側は、文学語の範囲を越える概念として「国語」を使っている。だから後半部から日本語への翻訳と創作という主題が明らかになって、『京城日報』も「内地語」という表現を使ったのではないだろうか。

¹³ 1937年5月に組織された朝鮮文芸会は、総督府の学務局長・富永文一と社会教育課長・金大羽が主導して、李光洙、崔南善、玄済明など朝鮮人名士と京城帝大教授・高木市之助、佐藤清をはじめ、歌人・鎌田沢一郎など、内地人側の文芸家40人余りで構成された「総督府保護下」の団体である(横矢武男「朝鮮文芸会に対する是々非々の所感」『朝鮮行政』1937年7月、46頁)。このように官主導の団体であった点以外に特異なのは、一部(内地人)と二部(朝鮮人)、すなわち民族あるいは使用言語を基準として分け、「文芸に関する研究調査を挙げるだけでなく、社会教化方面でも積極的に関与して、社会教化に符合する作歌を作曲、レコードで作り、文芸映画を作成する方針」として組織されたということである(「文芸研究に教化作歌や映画も製作——流作家、作曲、音楽家らが朝鮮文芸会を創立」『大阪毎日新聞』、S12.4.27.)。だが、『人文評論』の記事は、一介の「流行歌製作団体」に過ぎなかった「朝鮮文芸会」の前轍を踏むべきでないことを主張し、一歩進んで「万一、文学を豊かにできず、文学を進歩させずに、ラッパと太鼓だけで文人協会を生かそうとするならば、それは青年団員であって文人協会員ではない」と強調した(張江「葛秋語」『人文評論』1939.12、91頁)。

¹⁴ 杉本長夫「半島文壇と内鮮一体」『朝鮮』、1940.3、74頁。

作家団」の組織につながった。別名「朝鮮文壇部隊」といわれたこの作家団は、朝鮮文人 50 人余りが集まって発起人大会を持ち、候補と実行委員を選出した¹⁵。

一方、植民本国では文藝春秋社の『モダン日本』が 1939 年 11 月に臨時増刊号として「朝鮮版」を発刊した。朝鮮文人協会の創立と同時に発刊されたこの「朝鮮版」は、馬海松の「数年間温めていた計画が実を結んだ」企画だった¹⁶。この雑誌は李孝石、李泰俊、李光洙の小説や朱耀翰や金起林などの詩を翻訳して掲載するのみならず、朝鮮を紹介するあらゆる画報をはじめ、小説、「朝鮮読本」、随筆、時局に関する文章など、多様なジャンルの文章を載せて、朝鮮案内書のような体裁をなしている。特に雑誌の最初に配置された 3 編の「内地」作家の小説、浜本浩の「旅愁」、加藤武雄の「平壤」、大仏次郎の「面影」はすべて朝鮮旅行の体験をもとに書かれた作品である。だが、これらの作品が「朝鮮版」を「代表」したという事実は、朝鮮内の内地人文壇(特に小説)が「貧困」あるいは「不在」とであると判断した編集意図の結果といえる。

このように植民地朝鮮を見せ、語り、あるいは回想する、この「朝鮮版」の中で、座談会と関連した小文の一つがまさに辛島の「内地人として」というタイトルの文章である。座談会場で彼はほとんど沈黙で一貫した。この文章は彼の沈黙の意味を示しているようでもある。まずタイトルの中の「内地人」という用語は、その発話対象である内地人に対して、彼らと異なる「内地人として」自身の立場を規定したものゆえに特別な意味を持つ。換言すれば、この文章は、その用語を使って(朝鮮に来ている)「内地人」が(植民本国の)もう一人の「内地人」に発話する、話者＝在朝日本人と聴者＝日本人の関係と違いを最も明瞭に示している。京城帝大「支那語学支那文学」助教授であり朝鮮文人協会幹事の立場で、彼はこの文章を通じて、内地の文壇が朝鮮文学、あるいは文化全般にだけ関心を持つだけでなく、朝鮮に住む内地人に対する生活と思考にも注意を注ぐことを要求する¹⁷。朝鮮で生まれ育った若い世代の間には、この土地特有の生活が付与した何かがあるので、「そのような親子二代の朝鮮生活の感情は、土地の文学の何かに表現されなくてはならず、少なくとも文学の道を歩む程度の人、ある程度の関心をこの方面に持つように願う」というのである¹⁸。だが、そのような要求をしながらも、彼が恥ずかしく思ったのは、本来「(朝鮮内一引用者)内地人自身がこれまで自分たちの生活をゆっくり深く掘り下げて振り返ってみたり、その真実の心を文学で表現しようと望んだこともなかった」という事実だった¹⁹。古陶磁器に対する嗜好、釣り、野球、娯楽映画、マージャンを楽しむ人は多いが、「自身の生活、あるいは周囲の生活を凝

¹⁵ 一名、この「文人部隊」は、実際 1939 年 4 月 15 日には朝鮮神宮に参拝した後、京城駅で北行列車に乗って金東仁、朴英熙、林学洙の 3 人が戦線に派遣された。(「价川官民合同、皇軍慰問会組織」『東亜日報』、1937.8.5. / 「朝鮮文壇部隊候補、実行委員選出」『東亜日報』、1939.3.16.)

¹⁶ 菊地寛「朝鮮版へのことば」『モダン日本—朝鮮版』1939.10、73 頁(韓日比較文化研究センター『日本雑誌モダン日本と朝鮮 1939』語文学社、2007)。

¹⁷ 寺島は内地文壇の人間と座談でこのような内容を取り上げ論じたことがある。本稿でも言及したが、1938 年 10 月、日本の新協劇団が「春香伝」を京城で公演するために朝鮮に来たことを契機に、内地文壇の林房雄、村山知義、秋田雨雀、張赫宙などが参加した座談会が開かれた(「朝鮮文化の将来と現在」『京城日報』1938.11.29～12.8)。

¹⁸ 辛島驍「内地人として」『モダン日本—朝鮮版』1939.10、171 頁。

¹⁹ 前掲文、同頁。

視して、それを文学——特に小説で人々に語ろうと努力する者はほとんどいなかった²⁰として、朝鮮内の内地人文学の貧困を告白したりもしている²¹。

もしこの文章が、京城座談会で辛島が沈黙した理由を表明するものならば、これは座談会で在朝日本人(文学)に対する関心と議論の不在を事後的に指摘したものといえる。一方、座談会で京城日報の学芸部長・寺田瑛も沈黙するのは同じだった。さらに彼は『文學界』版本では名簿から除外されもした。そのような彼が朝鮮文人協会の結成を契機に「内鮮にかけて交友」が始まったことを回顧しながら、それ以前には『京城日報』学芸面を「朝鮮中心」に構成しようとするれば、「朝鮮の文人はきわめて少なかった」という状況を指摘したように²²、「朝鮮に関しては何も知らない」「質問者＝内地人」と「返答者＝朝鮮人」という構図の中では排除された。むしろそこで在朝日本人(文化人)の立場を守ろうとした『京城日報』版本の座談会の編集意図や観点を読み取る必要がある。この点が、『文學界』版本が徹底的に彼らを疎外させたこととの明らかな違いであるといえる。

したがって『文學界』と『京城日報』で互いに座談会を掲載した事実、あるいは掲載する可能性を認知したとしても、二つの版本はそれぞれ異なるテキスト作りの産物といえよう。だが、より重要なのは、朝鮮人が座談会で多くの発言はしたものの、その発言が「国語」あるいは「内地語」で文字化＝編集される過程で完全に排除されたという事実である。これは彼らにとっての京城座談会が、在朝日本人や「内地」文人が顕示するままに表現されざるを得ない、自らの「悲しい」境遇を確認する場であったことを意味するのである。

²⁰ 前掲文、同頁。

²¹ それもそのはずで、『モダン日本』『朝鮮版』とはいいが、その中には本来の朝鮮内の内地人作家の声は見られない。菊地寛が「朝鮮にも文壇があって多くの作家がいるようだが、まだその作品に接したことがない」と発刊の趣旨で明らかにしたように、李光洙の「無明」をはじめとして李孝石の「そばの花の咲く頃」や李泰俊の「からす」を翻訳して掲載し、朱耀翰らの詩 6 編を翻訳・紹介して、比較的、朝鮮(語)文学に多くの比重を置いた。その他には朝鮮の風物を紹介した朝鮮人の随筆や、「内地人が知ってくれたらと思うこと」などの問答型の文章が掲載されたが、その比重と時事性は内地人の文章に比べて顕著に落ちる。内地人の文章は二つに整理して分けることができる。「戦争」や「内鮮一体」のように時事的な内容の文章は、関屋貞三郎(中央協和会理事長)や塩原時三郎(総督府学務局長)など、朝鮮内の日本人官僚らによって書かれ、旅行者の観点で朝鮮の風物を記録したものはおおそ内地出身者たちである。

²² 寺田瑛「東京時代・京城時代」『朝鮮』1944.1、63 頁。